

## ラシーヌ悲劇について

— その1 —

### 『ラ・テバイッド』

戸 口 民 也

『ラ・テバイッド』の主題は憎悪である。ところでこの憎悪だが、われわれがこの劇に接してみてもまず感ずることのひとつに、劇の主人公であるエテオクルとポリニスとが互いに対して抱く憎しみの異常なまでの激しさをあげることができよう。たしかにこれは、劇の副題に端的に示されているように、「敵同士の兄弟」の悲劇である。だがそれにしても、なぜラシーヌは兄弟の憎悪をあれほどまで執拗なものとして強調したのだろうか。われわれが目にするのはまさにこの点で、また、そこから、このいわばラシーヌ悲劇の出発点にあたる作品のみならず、その帰結点ともいべき作品（『フェードル』、さらには晩年の宗教悲劇）に至るまで、ほとんど一貫してラシーヌ劇の中心的テーマをなしている問題が明らかにされるように思われるのである。

「ところで、彼ら〔エテオクルとポリニス〕をすっかりとりこにしているこの有名な憎悪に対する関心以外の関心を、彼らに与えるというようなことが考えられようか」とラシーヌは序文で述べているが、この言葉が仮に、その当時の習慣からすれば「悲劇の中で通常大きな部分を占める」べきはずの恋愛が「ここではほとんどその場所をもたぬ」ことに対する弁解の意味を含んでいるにせよ、むしろそれ以上に重要なことは、ラシーヌが彼らにまさに「憎悪に対する関心以外の関心」をまったく与えなかったということである。つまりラシーヌは、オイディプスの息子たちの王位をめぐる争いを題材として悲劇を書くにあたって、その争いをかってないほど激しい憎悪によって支えたのである。さらに言えば、ラシーヌは二人の兄弟の争

いを、王位をめぐる争いというよりはむしろ根源的には彼らの憎しみ自体に由来する（それだけに一層根深い）争いとしてとらえているのである。

(3)

「わたしはエウリピデスの『フェニキアの女たち』にほぼ即して構想を練った」とラシーヌは序文で述べているが、われわれはこの言葉のある程度留保をつけた上で考える必要がある。それは、ひとつには彼が『ラ・テバイッド』を書く際に、序文では冷淡に扱われているが実際にはセネカの『フェニキアの女たち』や、とりわけロトルーの『アンチゴヌ』から多くを得ていることが明らかであるという事情によるのだが、もうひとつには、——エウリピデスの役割は今述べたような事実からみてもかなり割り引いて考える必要はあるが——ラシーヌの兄弟の憎しみとエウリピデスの兄弟の争いとの違いには重大な質的相違がみられるからである。

ラシーヌの『ラ・テバイッド』とエウリピデスの『フェニキアの女たち』とを安易に比較するとしたら、おそらく軽率のそしりをまぬがれないだろう。なによりもまず、エウリピデスの作品が『ラ・テバイッド』の直接のモデルとなっているとは言い難いからである。だが、たとえ「直接のモデル」とは言えないまでも、少なくともエウリピデスの作品がその本来の意味においてラシーヌの作品の出典であることには変わりがないのであるから、両者をあえて比較することも決して無意味ではないと思われる。また、そうすることによって、ラシーヌが同じ題材を扱いつつ、そこに彼独自の——われわれはそれをラシーヌのと言うのだが——悲劇的世界を早くもつくりあげていることがより一層明らかにされるのである。

エウリピデスの兄弟の争いはあくまで王位をめぐる生じたものと言える。たとえば、そこにオイディプスの呪いが介在しているにはちがいないにせよ、彼らがテーバイの王位に執着していることに変わりはない。それゆえ、結局は呪いが実現して二人が殺し合い破滅することになるにしても、彼らの争いは王位の問題が解決されるならば——あるいはそれが彼らの死によって、もはや問題とされる余地がなくなってしまうならば——そこで終わるはずのものである。たとえばわれわれは、ポリュネイケスが祖国に対して愛着を抱き、肉親に対しても変わらぬ情愛を持ち続けているのを見るだろう。彼の憤りは、自分の正当な権利をエテオクレスが不当にも奪ったことにある。父オイディプスの呪いを避けるため、彼はテーバイを離れた。

そして、呪いを避けようとしたこと自体が——皮肉なことに彼の父オイディプスの場合と全く同様に——呪いを成就することになってしまったのである。しかし、ポリュネイケスはなおかつ和解の道求めて母親にとりなしを求める。彼は正当な権利さえ得られれば——それをあくまで主張すること自体が呪いを成就させることになるのだが——、すぐにも和解する用意があるのだ。しかし、エテオクレスの頑なな拒絶によって和解の道は絶たれ、兄弟は互いに殺し合い、呪いは成就される。とはいえ、二人が共に倒れたとき、彼らの不幸な争いは終る。エテオクレスは、それまでの傲慢な態度を捨てて、母に手を差し伸べ、「一言も口はきけずに、両の目の涙で最後の別れを述べ」、「愛情のしるし」<sup>(4)</sup>をみせて息絶える。またポリュネイケスは母と妹に、「母よ、われわれはもうおしまいです。あなたも、この妹も、死んだ兄も気の毒に思います。兄は親しい人だがわたしの敵になりました。それでもやはり親しい人です……」<sup>(5)</sup>と言って死ぬ。

このように、エウリピデスの兄弟は王位をめぐる争いはしたが、その争いは彼らの死によって終りを告げている。しかし、ラシーヌの兄弟の争いは更に深刻である。エテオクルとポリニスのあいだには最初から最後まで和解の成立する余地など全くない。なぜなら、彼らの対立は、王位に対する執着である以上に彼ら自身が互いに抱えている憎悪に由来するからである。彼らが真に望んでいるものは王位ではない。王位を争うことによって彼らの憎しみを一層かきたてることを欲しているのである。『ラ・テバイッド』第4幕第1場のエテオクルの言葉は、ラシーヌの兄弟の争いの本質をはっきりとあらわしている。エテオクルがポリニスを憎むのは、王位をめぐる争いゆえではない。

彼の傲慢さが憎いのではない、わたしが憎いと思うのは、ほかならぬ彼自身なのだ……<sup>(6)</sup>

彼が権力をわたしに譲ったりすればかえって残念にさえ思うだろう……<sup>(7)</sup>

ここでひとつの逆転が——それも極めて重要な逆転がおこる。兄弟は争うがゆえ

に憎み合うのではない。憎み合うがゆえに争わずにはいられないのである。この場合、エウリピデスが必ずしもラシーヌの直接のモデルになっているわけではないということをごとさら問題にする必要はない。問題にすべきことは、ラシーヌが《呪われた一族》というテーマを扱うにあたって、その呪いを兄弟の対立と死という不幸な結果のなかにとらえているにはちがいないだろうが、それ以上にそうした結果をもたらさずにはおかない兄弟の激しい憎悪のなかに《呪い》の明らかなしるしがあることをむしろ強調している、という点である。

われわれは互いに執拗な憎しみを抱きつづけてきた。

それは、クレオン、一年やそこいらで出来あがったものではない。

それはわれわれと共に生まれたのだ。そのいまわしい憤りは、

生命と共にわれわれの心に入りこんだのだ。

われわれはほんの幼いころから敵同士だった。

いや、それどころか、生まれる前からそうだったのだ。

不倫の血がもたらした陰惨な宿命の結果なのだ！

われわれ二人が同じ胎内にあったとき、

母の腹の中での戦いが、

不和のはじまりを母にしらせたのだ。

おまえも知ってのとおり、不和はゆりかごの中であらわになった。

おそらくそれは墓の中までわれわれにつきまとうことだろう。

まるで天がいまわしい判決を下して、

両親の不倫の業をこのようにして罰し、

われわれの血の中にある、愛と憎しみのもつ

最もおぞましいものをすべてあばきたてようとしたかのようだ。<sup>(8)</sup>

このように、ラシーヌの兄弟にとって呪いとは、根本的には彼らが互いに争い殺し合って破滅することにあるのではなく、彼らをそこにかかりたてる衝動、すなわち彼らの憎しみそれ自体のなかに存在するのである。それはもはや息子たちの不当な

仕打に激怒した盲目のオイデプスが息子たちにかけた呪いではない。それは更に根深い、兄弟の存在の本質、つまり彼らの血のなかにある「愛と憎しみのもつ最もおぞましいもの」にかかわっているのである。彼らの憎悪は「不倫の血がもたらした陰惨な宿命の結果」であり、またそれが彼らにかけられた呪いであり、また彼らの宿命にはかならない。

互いに憎み合うこと、そして憎み合うことによって彼らの存在それ自体にひそむ邪悪なものをすっかりさらけ出すこと、——それが彼らにかせられた宿命である。そして、このように憎悪という情念の中に宿命を見出した点に『ラ・テバイッド』の兄弟の対立の深さと、劇の結末の救いようのない陰惨な調子との原因がある。というのも、エテオクルとポリニスの争いが彼らの憎悪に由来する以上、しかもその憎悪が彼らの宿命にはかならない以上、破局は絶対に避けることができず、和解の成立する余地は全くないからである。エウリピデスの兄弟の争いは彼らの死によって終りを告げる。しかしラシーヌの兄弟の反目は、「おそらく墓の中までわれわれにつきまとうことだろう」とエテオクルが予感しているとおりになる。

死んでもなお、姫、彼〔ポリニス〕は怒りを捨てずにおります。

そしてなおも兄君をおびやかしているかのように見えます。

死相のひろがったその顔は、

いまだかつてなかったほど恐しく、また傲慢不遜なものに見えました。<sup>(9)</sup>

ラシーヌの宿命というとき、われわれはこの言葉からすぐに情念を連想し、また《破滅的・宿命的情念》をとりあげることによって、ラシーヌ悲劇の特徴を説明しようとする。事実ラシーヌ悲劇においては情念（それも多くの場合恋愛情念）が人間を破滅に導く根本的要因として提示されているし、情念それ自体が宿命として人間を支配しているのが明らかに感じられる作品（例えば『ラ・テバイッド』や『フェードル』）があることはたしかである。こうした特徴はすでに『ラ・テバイッド』にはっきり打ち出されている。しかし、ここで今さらのようにラシーヌ悲劇すなわち情念の悲劇といったようなきまり文句を持ち出したところで何の意味もな

いし、またわれわれの意図するところでもない。問題は何故ラシーヌ悲劇においては情念が悲劇をもたらす根本的な要因であるのか、あるいはそれが宿命的であるのかを明らかにすることにある。そして、それは当然ラシーヌの悲劇的世界観にたちいることなしにはすまされまいだろう。

ラシーヌの宿命は、人間の情念にモチーフをおいているがゆえに、内的宿命である、としばしば言われているが、こうした言い方はまだ不十分で、さらに検討を加える必要がある。「ラ・テバイッド」の場合を例にとって考えると、すでに見たようにそこでは破局は絶対避けられないものとしてとらえられているが、もうひとつ付け加えると、破局に至るまでの過程で偶然的な要素とか主人公の外部からその運命を左右する力とかが介入する余地が全く認められないことに注目すべきであろう。ギリシア悲劇においては予言や神託が、あるいは主人公がおかれた状況が、さもなくば神々の直接的な介入といったものが主人公の運命に大きく作用する場合がしばしばある。その意味でギリシア的宿命とは、オイディプスの運命に典型的にあらわれているように、偶然と必然とが微妙に交叉し合う「三筋の道の合う場所」に象徴されると言えるであろう。人間はある時には運命にさからい、ある時には傲慢ゆえに盲目となり、またある時は避け難いものとして運命に従う。だが、いずれにせよ彼を最後に待ち受ける結末へと導かれることに変わりはない。いわばそれはもしかしたら避けられたかもしれないがなおかつ避けることが不可能だったものなのである。ところが、ラシーヌ悲劇においては人間存在の本質に由来する内的な必然性、不可避性のみがむしろ強調されて、偶然的、外的な要因はほとんど完全にと言ってよいほど欠落しているのが特徴である。それというのも、ラシーヌの主人公は、彼がまさしく彼自身として存在すること自体が宿命的な様相を帯びていて、そこに外的な条件が作用する余地がなく、またその必要もないためである。エテオクルとポリニスはその宿命ゆえに憎み合っている。それだけでもう十分なのだ。あとはその憎悪にすべてを委ねるだけでよいのである。もしもオイディプスが《地獄の機械》にまきこまれて破滅へと導かれる人物だとすれば、エテオクルとポリニスは彼ら自身が《地獄の機械》として誕生した人物で、単に自らその憎悪の衝動によって破滅へとひたすら向かうだけでなく、周囲の者たちをも彼らの自己破壊運動

のなかにまき込んでゆくものと言えよう。

どうやらわれわれはラシーヌの悲劇的世界観に言及すべきところまで来たようである。ところで、エテオクルとポリニスの憎悪はその根源においては彼らのあずかり知らぬ罪ゆえにもたらされたものであるが、それが彼らにかせられた逃れられない宿命としてはっきりと意識されるとき、そこにひとつの深刻な問題が提起される。それは悪の存続の問題である。

おお、日輪よ、この世界に光を返す神よ。

なぜあなたはその光を深い夜の闇の中に打ち捨てておいてはくださらなかったのですか！

この忌むべき罪にもあなたはその光をあてて

わたしたちが目のあたりにしている出来事を、恐ろしいとも思わずに見ていられるというのですか？

ああ、しかし、このような罪深い所業にも、あなたは驚いたりはなさるまい。

ライユスの一族はそれをありふれたことにしてしまったのだから。

父と母の犯した罪のあとでは、息子たちの罪も

恐ろしいとも思わずに見ていられるはず。

息子たちが不忠者であれ、二人とも悪人であれ、

さらには兄弟殺しであろうとも、驚かれたりはなさるまい。

あの二人が不倫の血を引いていることはあなたもご存じのとおり、

もし二人が高潔の士であろうものなら、かえって驚きもなさるでしょう。

この詩句は『ラ・テバイッド』の冒頭近くで語られるが、早くもここで、われわれはラシーヌが彼独自の悲劇的世界観をあざやかに提示していることを感じ取ることができる。ここで切実に提起されている問題は悪の存続の問題である。一度悪が決定的な事実としてこの世界に侵入するやいなや、その悪は動かし難い現実としてこの世界に定着され、何者も悪の存在を否定することはできなくなってしまう。し

かもそうしてこの世界に定着した悪は更に新たな悪を誘発してゆくため、ついには世界はとり返しがつかないまでに悪に染まってしまうことになりかねない。こうした認識は、同じ血筋のうちと同じ罪や不幸の繰り返ししか認められないことからくるのだが、それがさらに同じ血筋のうちと同じ罪が繰り返されるのは避けられないという絶望的な確信に支えられるとき、その認識はまさに悲劇的としかいいようのないものとなる。どこかで罪が犯される。するとその罪は、罪を犯した人物個人の段階にとどまらず、その血筋を引くものにまで影響を及ぼさずにはおかない。エテオクルとポリニスが憎み合い殺し合おうとするのも、彼らの両親の犯した罪、彼らの出生のいわれを考えれば当然のことで、まさに近親相姦と親殺しの血筋には兄弟殺しがふさわしいというわけである。

このように、『ラ・テバイッド』において示されているラシーヌの悲劇的世界観は、同じ罪、同じ不幸を不可避的に繰り返さずにはおかない血筋という要因によって悪の存続が決定的となる、とする認識によって支えられている。とすれば、人間の運命は彼が何者であるのか、いかなる血筋のものであるかによって決まってしまうわけで、従ってそうした世界では、もはやギリシア悲劇におけるように神々がいちいち人間をその運命へと導くまでもなく、人間自身がその存在の最も奥深い部分にひそんでいる悪の要素にうながされて、自らの運命を成就してゆくことになるのである。ラシーヌ的宿命が内的宿命であると言われるのもこうした理由からで、またそれゆえに情念が悲劇のモチーフとなりうるのである。なぜなら、親や祖先の犯した罪によって人間の本性が救いようもなくなる悪に染まってしまうのが現実であるとすれば、またそれゆえに人間は悪の要素にうながされるほかないとすれば、そのとき人間をその運命へとかりたてる衝動は、激烈で何ものによっても抑えることのできない情念という形をとってあらわれるからである。

こうした悲劇的世界観はポール・ロワイヤルの影響をぬきにしては考えられないが、ラシーヌはジャンセニストたちの思想の中でも最も悲観的な部分にとりわけ強く反応を示しているように思える。人間の本性は原罪によって根源的に墮落しており、そのため人間は自らの力だけではいかなる善もなしえず、人間の自由意志は虚偽と罪だけをなすにふさわしい状態にある、というのがアウグスティヌスに依拠す

るジャンセニズムの教義であるが、この厳格な決定論からアダムの罪がその自由意志によってなされたという点と神の思寵による救済という観念とが取り除かれ、そのかわりに本来潔白であった人間をいわれのない罪におとし入れ人間に墮落をもたらす神々という観念が導入されたとき、そこにあらわれるのが『ラ・テバイッド』の世界である。<sup>(11)</sup>

ラシーヌが劇界にデビューするにあたって書いた悲劇で描いてみせた世界は以上のようなものである。それは救いようもないほど悪に染まった世界である。しかもその悪は神々によってもたらされたものであり、人間の墮落が神々の意図によるものだとしたら、むしろ神々の方こそ人間以前に、そして人間以上に墮落しているのではないだろうか。ここから、神々に対する非難の叫びがおこってくる。

おお、神々よ、この不運な血筋があなたがたに何をしたというのですか？

なぜその血筋のものすべてを罰そうとなされるのでしょうか？

父の死だけではまだならず、

わたしたちの血筋のものすべてがあなたがたのお怒りを思い知らねばならぬのですか？<sup>(12)</sup>

だがそれにしても、神々よ、知らずに犯した罪が

あなたがたのありとあらゆるお怒りを招かねばならぬのですか？

ああ、わたしに見分けられたでしょうか、あの不運な息子が。

あなたがた御自身が、わたしの腕の中につれてこられたというのに。

なまじり容赦なくわたしの前に破滅の淵を開いたのは、あなたがた御自身。

これが偉大な神々の至高の正義というものなのでしょうか！

神々は罪の淵までわたしたちの歩みを導かれる。

そうやってわたしたちに罪を犯させておきながら、その罪を赦そうとはなさらない！<sup>(13)</sup>

もしも神々が人間を望んでもみなかった罪に導いたのであれば、罪はむしろ神々

の側にある。人間に不当な運命を押しつけようとする神々の意志こそ実は不当なのだ……。しかし、いくら神々は不当だと叫んでみても問題は少しも解決されない。それどころか、さらに悪いことに、神々が不当で悪意に満ちていることが確実となればなるほど、そうした神々によって支配される世界の現実が悪であることは一層明白になるほかないのである。そしてこのことが劇全体をおおう絶望的な、しかも次第に自暴自棄的になってゆく調子を決定しているのである。

この絶望的な調子はジョカストにおいて最もはっきりとあらわれている。彼女は自分の血筋が完全に墮落してしまったと感じている。彼女が目のあたりに見ている息子たちの「罪深い所業」も、ライユスの一族にとってはもはや「ありふれたこと」でしかない。たとえその本源においては神々の意図が働いていたにせよ、ライユス一族の墮落した現状はどうしても否定しようのない事実なのである。しかも、ジョカストには、神々がこうした現状に救いの手を差し伸べるどころか更にそれを助長しようとしているとしか思えない。それゆえ、彼女が神々の不当さを非難するとき、その非難は二重の意味で絶望的となる。なぜなら、もし仮にその非難がいわれのないものであったとしても、彼女の一族の墮落は神々の意図とは無関係に、一族自体が本来悪への傾向といったものをその本質として持っていると考えのほか説明しようがなくなるし、また神々が彼女の非難するおりの存在であるならば、息子たちを和解させようといかに努力してみたところで、それが失敗に終ることは間違いないからである。それに彼女は、決定的な破局を回避させようと必死に努力してはいるが、結局はその努力が実を結ばず、前々から恐れていた破局が最後には到来するのではないか、という強い危惧の念を抱いている。——という以上に、ほとんどそう確信しているときえ思われる。メネセの自己犠牲によって事態が好転したかに見えたときも、彼女の不安は少しも変わらない。

天のくだす恐ろしい復讐はそんななまやさしいものではない。

天はいつもわたしの苦しみにながしかの合間をおいてくださっている。

だが、いまわしいことに、天がわたしに救いの手を差し伸べてくださるように見えるとき、

そのときこそ、天はわたしを破滅させようと準備をととのえておられるのです。<sup>(14)</sup>

そのジョカストの陥った唯一の幻想は、《人の情》(人間の本性からのうながし)<sup>(15)</sup>が息子たちを和解させる力となりうるのではないかと考えたことである。だが、エテオクルとポリニスの本性は、両親の犯した罪ゆえに、もはや悪をなすことに対してしかふさわしくない状態、つまり根源的に墮落した状態にあるのである。それゆえ、彼らの憎悪は彼らの墮落した本性からくるものであり、またそれこそが、「不倫の血がもたらした陰惨な宿命の結果」にほかならない。ジョカストの幻想はたちまちにして打ち砕かれる。

ああ、神々よ、わたしはなんと残酷に裏切られたことでしょう。<sup>(16)</sup>

もはや二人には人の情さえわからなくなってしまっている。<sup>(17)</sup>

だが正確にはジョカストは「裏切られた」のでは決してないし、兄弟は「もはや人の情(本性からのうながし)さえわからなくなってしまっている」というよりはむしろ彼らの本性のうながすところに従っているにすぎない。結局のところ、彼女が実際には認めていながら、母親としての情愛ゆえにできることなら認めずにすませたいと願わずにはいられなかったことがらが、ここでより一層明らかになっただけのことなのである。

おまえたちの先祖の罪を、できるものなら凌駕するがよい。

互いに殺し合うことで、おまえたち二人がまぎれもなく兄弟であることを証明するがよい。

すべてにまさる大罪がおまえたちに生命を与えたのだ。

それに匹敵する罪が、その生命を奪うのも当然というもの。

おまえたちを駈りたてる怒りをもはやとがめはしません。

わたしはもう自分の血筋に憐憫も情愛も感じてはいない。

おまえたちという手本のおかげで、自分の血筋をいとおしんではならないと知

ったのです……<sup>(18)</sup>。

ところでわれわれは、ここに至って、劇の中心的問題が微妙に変化していることに注目したい。この劇の冒頭で語られた「おお、日輪よ、この世界に光を返す神よ…」以下の詩句にこめられていた深い絶望の調子が、自暴自棄的な色合を一層濃くしてここに再びあらわれていることはたしかだが、そこにはもはや不当な神々に対する怒りや非難の感情も、破局に対する恐れも、肉親に対する愛着も一切入りこむ余地のない、ただひとつ確かな感情である絶望のみが支配しているのである。ここではもはや悪をもたらした神々の不当さといったことは中心的な問題とはされなくなり、それ以上に、今や人間の本性に決定的に根をおろしてしまった悪と、そのように悪にとりつかれた人間の存在によって根本までむしばまれているように思われる世界の墮落した様相とがあらわに提示されているのである。日の光によって明るみにさらされるのさえはばかれるというのがこの世界の墮落した様相であり、永久に明けることのない夜の闇こそむしろそれに似つかわしいとする意識のなかに、ひとつの確信が生まれる。すなわち、もしそれが世界の現実であり人間存在のありようだとすれば、また神々にそうした状態を改めようとする意志が全くない以上、すべては行き着くところまで行くしかない、つまり神託に示されたように、悪にとりつかれた血筋が一人残らず滅びることによってしかこうした状態を終わらせる方法はないのだ、という確信である。第5幕でわれわれは主要人物全員が相次いで悲惨な死をとげるのを知るのであるが、それはつまり、以上のような確信をそういった結末によって具体的に証明しているものにほかならないのである。

こうして問題の中心が神々の悪意（あるいは別の言い方をすれば悪の起源）から人間の墮落した状態とそうした墮落の永続化によって根源まで悪に浸透された世界の現実へと移って行くのを見るとき、われわれは『アンドロマック』以後に描かれることになるラシーヌ悲劇の世界を予感することが可能となる。<sup>(20)</sup>

『ラ・テバイッド』においては世界のありようを決定する存在として絶えず意識されていた神々が、次第に人間の意識から遠ざかり、ついには全く姿を消してしま

うとき、しかもなおかつ世界は依然として悪であることに変わりがないとき、その悪は純粋に人間的なものとして提示されることになるだろう。『ラ・テバイッド』から『アンドロマック』『ブリタニクス』へと至る過程において、こうした推移が見てとれるのだが、——またさらにそれ以後の作品においては、そうした問題があらたな展開をみせることになるのだが——その点に関する具体的な検討は今後に委ねることにしたい。

- 註 (1) Et quelle apparence de leur [aux deux frères] donner d'autres intérêts que ceux de cette fameuse haine qui les occupait tout entiers? (Préface de «La Thébaine»)
- (2) L'amour, qui a d'ordinaire tant de part dans les tragédies n'en a presque point ici. (ibid.)
- (3) Je dressai à peu près mon plan sur «les Phéniciennes» d'Euripide. (ibid.)
- (4) エウリピデス『フェニキアの女たち』（大竹敏雄訳、人文書院、ギリシア悲劇全集Ⅳ）
- (5) 同上
- (6) Ce n'est pas son orgueil, c'est lui seul que je hais. (Acte IV, Scène I.)
- (7) J'aurais même regret qu'il me quittât l'empire. (ibid.)
- (8) Nous avons l'un et l'autre une haine obstinée:  
Elle n'est pas, Créon, l'ouvrage d'une année;  
Elle est née avec nous; et sa noire fureur  
Aussitôt que la vie entra dans notre cœur.  
Nous étions ennemis dès la plus tendre enfance;  
Que dis-je? nous l'étions avant notre naissance. (\* )  
Triste et fatal effet d'un sang incestueux!  
Pendant qu'un même sein nous renfermait tous deux,

Dans les flancs de ma mère une guerre intestine  
 De nos divisions lui marqua l'origine.  
 Elles ont, tu le sais, paru dans le berceau,  
 Et nous suivront peut-être encor dans le tombeau.  
 On dirait que le ciel, par un arrêt funeste,  
 Voulut de nos parents punir ainsi l'inceste,  
 Et que dans notre sang il voulut mettre au jour  
 Tout ce qu'ont de plus noir et la haine et l'amour. (ibid.)

ただし初版(1664年)および1676年の第1回全集版と1687年の第2回全集版では(※)印を付した詩句以下7行は次のようになっている。

[われわれはほんの幼いころから敵同志だった。]  
 そのときからすでにわれわれは激しく争っていたのだ。  
 ゆりかごを争ったときと同じように、われわれは王位を争っている。  
 おそらく墓の中でもわれわれは敵同士として争い続けるだろう。  
 [まるで天がいまわしい判決を下して…]

[Nous étions ennemis dès la plus tendre enfance;  
 Et déjà nous l'étions avecque violence;  
 Nous le sommes au trône aussi bien qu'au berceau  
 Et le serons peut-être encor dans le tombeau.  
 [On dirait que le ciel, par un arrêt funeste…]

ヴァリエントという点のみについて言うならばこのすぐあとの詩句についても(さ  
 らには『ラ・テバイッド』全体にわたって)言及すべきであろうが、あえてここでは  
 ふれないことにする。(初版のテキストによる校訂版およびヴァリエントの詳細な研  
 究としては Michael Edwards: La Thébàide de Racine, Paris, Nizet, 1965  
 があるので、それ参照されたい) だが上にあげたヴァリエントについては、それが  
 この小論の主旨と基本的にかかわってくるため、特にここで取りあげておく必要があ  
 ろう。このヴァリエントで最も重要な点は、兄弟の憎悪の本質を明らかにする上での  
 鍵ともなるべき詩句「不倫の血がもたらした陰惨な宿命の結果なのだ」以下4行の  
 詩句とその前後の詩句とが1697年の決定版においてはじめて追加され、あるいはそ  
 の追加にもなって、修正されたという点である。だが、決定版でのこうした追加、

修正は、兄弟の互いに対する憎悪がすでに彼らの誕生以前にさかのぼるものであり、  
 しかもそれが彼らの宿命であるということをより明確に打ちだすためになされたと  
 むしろ考えるべきであるように思われる。なぜなら、決定版と比較すればやや明確  
 さを欠くとしても、「まるで天が……」以下の詩句からも察せられるように、すで  
 に初版において兄弟の憎悪の宿命的な様相は明らかに示されているし、またそれは  
 この場面以外からも(例えば第1幕第1場のジョカストの言葉——これについては  
 後に引用するのでそれを参照されたい)裏付けられよう。

(9) Tout mort qu'il [Polynice] est, Madame, il garde sa colère;  
 Et l'on dirait qu'encore il menace son frère.  
 Son visage, où la mort a répandu ses traits,  
 Demeure plus terrible et plus fier que jamais.  
 (Acte V, Scène III)

(10) O toi, Soleil, ô toi qui rends le jour au monde,  
 Que ne l'as-tu laissé dans une nuit profonde!  
 A de si noirs forfaits prêtés-tu tes rayons,  
 Et peux-tu sans horreur voir ce que nous voyons?  
 Mais ces monstres, hélas! ne t'épouvantent guère:  
 La race de Laïus les a rendus vulgaires,  
 Tu peux voir sans frayeur les crimes de mes fils,  
 Après ceux que le père et la mère ont commis.  
 Tu ne t'étonnes pas si mes fils sont perfides,  
 S'ils sont tous deux méchants, et s'il sont parricides:  
 Tu sais qu'ils sont sortis d'un sang incestueux,  
 Et tu t'étonnerais s'ils étaient vertueux.  
 (Acte I, Scène I)

(11) もっとも『ラ・テバイッド』がギリシア悲劇における《呪われた一族》というテ  
 -マを受け継いでいる以上、当然のことながらラシ-ヌの悲劇的世界観のなかには  
 ギリシア的宿命観が、ジャンセニスム的決定論と同様に、大きな影を投げかけてい  
 るといえるが、その際にも、ジャンセニスムの場合と同じように、ギリシア的宿命



観のなかでも最も暗い側面が彼の悲劇の世界にとりわけ濃厚に反映されているように思われる。ラシーヌがギリシア的宿命観のなかに見てとったものは、時には人間に救いの手を差し伸べることもある神々の姿ではなく、残忍で常に怒りに満ちた神々、人間に呪いをかけ罪へとかりたてる神々の姿であり、またそうした恐るべき神々の仕掛けた罠に逃がれるすべもなく捕えられ破滅するしかない人間の姿である。こうしてギリシア的宿命観とジャンセニスム的決定論とが、共に救いという観念を欠いたままそれぞれの最も悲観的な部分において奇妙に結びついたとき、すなわち人間に呪いをかけ、人間を悪へと導く神々というモチーフと決定的に悪へと定められた人間の悲惨というドグマとが結びついたとき、ラシーヌの悲劇的世界観が形成されるのである。

(12) O Dieux, que vous a fait ce sang infortuné,  
Et pourquoi tout entier l'avez-vous condamné?  
N'êtes-vous pas contents de la mort de mon père?  
Tout notre sang doit-il sentir votre colère?  
( Acte II, Scène II )

(13) Et toutefois, ô Dieux, un crime involontaire  
Devait-il attirer toute votre colère?  
Le connaissais-je, hélas! ce fils infortuné?  
Vous-mêmes dans mes bras vous l'avez amené.  
C'est vous dont la rigueur m'ouvrit ce précipice.  
Voilà de ces grands Dieux la suprême justice!  
Jusqu'au bord du crime ils conduisent nos pas;  
Ils nous le font commettre, et ne l'excusent pas!  
( Acte III, Scène II )

(14) Connaissez mieux du ciel la vengeance fatale:  
Toujours à ma douleur il met quelque intervalle;  
Mais, hélas! quand sa main semble me secourir,  
C'est alors qu'il s'apprête à me faire périr.  
( Acte III, Scène III )

(15) la voix de la nature. [このすぐあとに引用される詩句および註(17)に引用されている原文を参照されたい] ここでいう nature という言葉にはおおよそ①自然、自然の道理、②本性、性質、人情 (自然の道理として当然人間にそなわっているはずの情愛) などの意味が含まれているが、ジョカストはこの nature という言葉をとくに《人の情》の意味あい使っている (そこに彼女の幻想があったわけだが、その点については本文を参照されたい)。

ところで、この同じ言葉が、「人間の本性は根源的に墮落している」La nature de l'homme est radicalement corrompue. というジャンセニスムの基本的主張においては全く逆の意味において使われていることをあらためて指摘する必要があるだろうか。

(16) O Dieux! que je me vois cruellement dégué!  
( Acte IV, Scène III. )

(17) Ils ne connaissent plus la voix de la nature. ( ibid. )

(18) Surpassez, s'il se peut, les crimes de vos pères;  
Montrez en vous tuant comme vous êtes frères:  
Le plus grand des forfaits vous a donné le jour;  
Il faut qu'un crime égal vous l'arrache à son tour.  
Je ne condamne plus la fureur qui vous presse;  
Je n'ai plus pour mon sang ni pitié ni tendresse.  
Votre exemple m'apprend à ne le plus chérir... ( ibid. )

(19) テーバイの者たちよ、もはや戦いを収めんとせば、  
宿命の命ずるところに従い、  
王家の血筋の最後の者が、  
その死によりて汝らが国土を血に染めねばならぬ。

Thébains, pour n' avoir plus de guerres,  
Il faut, par un ordre fatal,  
Que le dernier du sang royal  
Par son trépas ensanglante vos terres.

( Aete II , Scène II . )

(20) ただし、『ラ・テバイッド』の次に書かれた『アレクサンドル大王』については、こうした観点から作品を検討することは困難である。ひとつには、『ラ・テバイッド』の不成功によってラシーヌは時代の好みに合った作品を書かねばならぬことを痛感したためであろうが、『アレクサンドル』においては陰惨な宿命も血なまぐさい結末も排除され、およそ『ラ・テバイッド』の世界とは対照的な、優雅な恋とヒロイズムの雰囲気満ちた世界が描かれている。だがこの作品の検討は次回に委ねることとする。

\* なお、ラシーヌのテキストは《プレイヤード版》の全集 Racine, Œuvres complètes, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, 2 vol. 1950-1966 を使用した。原文引用はすべてこの版によるものである。